

備前西大寺の祭 「オマツト供養」の考察

丸谷憲二

1 はじめに

備前西大寺の祇園宮荒神社(岡山市東区西大寺中野本町・於亀荒神社)に「オマツト供養」と呼ばれる祭が伝承されている。オマツトの語源は「御的」である。御的の神事は全国的な神事である。他所の御的の神事と比較しながら於亀荒神の「オマツト供養」を考察したい。

2 御的の神事記録

① 平成 22 年 2 月 12 日(金)10 時集合。「事始めの準備」旧暦 12 月 29 日。

社殿内外の清掃。社殿の注連縄を新しくする。お甕(かめ)様の注連縄を新しくする。

弓矢 7 本作る。ご幣(へい) 3 本(女竹で)作る。(砂川土手)

大的 1, 小的(対雨性の紙で)作る。

掛け軸、奉書、ご神饌他準備 他



お甕様



祇園宮荒神社

② 平成 22 年 2 月 13 日(土)17 時集合。「事始めの祭礼」、三宝荒神様お迎え行事。

18 時から利生院 江村一光住職によるご祈念。旧暦 12 月 30 日大晦日の行事。



③ 平成 22 年 3 月 13 日(土)13 時集合「お当夜祈念祭(前夜祭)」準備。旧暦 1 月 27 日。
四本柱+くい+笹 4 本・弓場の準備。大的用笹 2 本と四本柱用笹 4 本の計 6 本。

④ 平成 22 年 3 月 14 日(日)7 時より利生院 江村一光住職の指示で「悪魔祓いの祭礼」を行う。
旧暦 1 月 28 日。



平成 22 年度の当番役 中野南 橋本班 1 班・2 班
利生院 江村一光住職と世話役 奥田啓一・原朗・定本孝彦・菱川征治氏 他

3 利生院寺伝「オマツト供養」と「三寶大荒神」

3.1 利生院寺伝「オマツト供養」

利生院寺伝「オマツト供養」が『西大寺町誌』と『西大寺の祭』に紹介されている。

オマツト供養 (利生院寺伝)

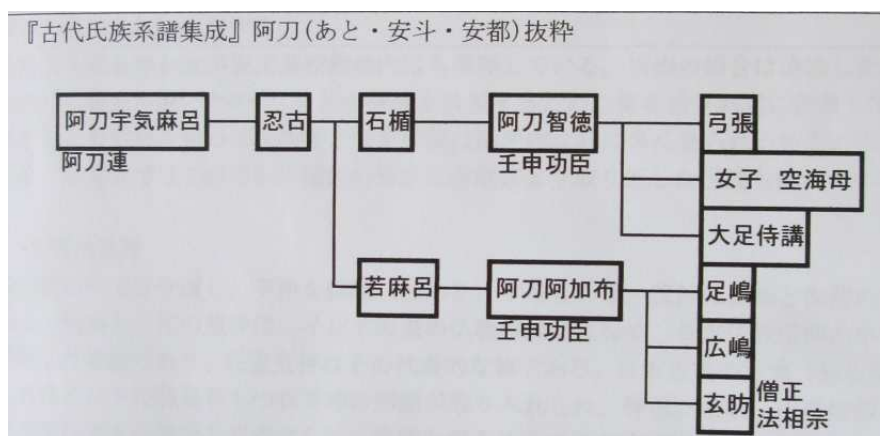
当院(利生院)より西四丁芳野村中野に於亀荒神の祠あり。由緒に曰ふ。元正天皇の靈龜二年(716 年)、玄昉大僧正の従弟冤罪(えんざい)行者、当山逗留のことあり。隅々讃岐国大串山に栖める悪龍海中に現れ、舟を覆し(くつがえ)屢々(しばしば)人命を奪ひ住民安からず。冤罪行者之を聞き、危害を除かんと行者神変大菩薩を勧請し、日杵目の祈祷を修し、暫くにして悪龍を退治し給ひければ、龍魂忍ち地の住民に祟り、疫病流行しければ、当山境域に祠を建立し、於亀荒神と祀れり。是れより龍害を絶ちければ、住民抔歎(うかん)随喜して、毎年悪龍退治の日を記念として祭典を執行せり。之をオマツト供養と称す。其儀式は龍蛇の模型を作り、後弓箭にて之を射殺する珍行事なり。

毎年旧正月二十七日の、日の出刻より翌朝二十八日之を行ふ。今は龍霊の鎮撫供養転じて、作物病虫

害、人事には流行病疫神除の供養となりたり。冤罪行者の採りたる悪龍の牙は伯耆(ほうき) 国(鳥取県) 東伯郡東伯村清連寺宝庫に珍藏すると云ふ。

3.1.1 玄昉大僧正

岡山県の寺院縁起で玄昉（げんぼう：生年不詳～746）の記録は利生院寺伝のみである。僧官は僧正である。玄昉は俗姓阿刀氏、霊亀 2 年（716）に吉備真備・阿倍仲麻呂らと共に 入唐し法相宗を学び、天平 7 年（735）に帰朝した。その際に経論五千余巻を将来し、天平 9 年に僧正となった。藤原宮子（聖武天皇の母）の病氣平癒の功勞によって宮廷の尊信を得、政治的にも吉備真備とともに橘諸兄政権の中心人物となった。天平 12 年（740）に玄昉と真備の排斥を狙い、太宰府で藤原広嗣の乱が起こされた。この 5 年後の天平 17 年に太宰府の観世音寺に左遷され、翌年に没した。



3.1.2 玄昉大僧正の従弟冤罪行者

玄昉大僧正の従弟冤罪行者の名前を推定したい。『古代氏族系譜集成』では、玄昉僧正 の従弟は不明である。自分からみて祖父母の兄弟姉妹の孫であるところに注目した。再従兄弟、ふたいとこともいう。「阿刀智徳の子は弓張、女子 空海の母、大足侍講である。空海の母の弟に注目したい。侍講(じこう)とは皇子付きの家庭教師である。従弟冤罪行者とは再従兄弟の「阿刀大足(あとのおおたり)」と推定する。阿刀大足が侍講を勤めた伊予親王が、兄の平城天皇(日本根子天推国高彦尊 やまとねこあめおしくにたかひこのみこと)により謀判の疑いをかけられ自殺している。後に親王の無実が判明した。この事実を暗示している。再従兄弟の再の欠落である。

3.1.2 讃岐国大串山

讃岐国大串山とは、香川県さぬき市の大串半島のことである。

3.1.3 伯耆国東伯郡東伯村 清連寺

伯耆国東伯郡東伯村 清連寺は、鳥取県東伯郡東伯町の近くの西蓮寺(鳥取県東伯郡湯梨 浜町大字橋津 252 番地)と推定している。橋津村(上橋津)より移転し天台宗寺院であった。

3.2 四国の悪龍伝説

四国の悪龍伝説は地藏寺地藏堂(霊魚堂)(香川県さぬき市志度 545 番地)に伝承されている。讃留霊王伝説とほぼ同じ内容である。地藏寺は志度寺を建立した凡園子(おおしそのこ)尼により飛鳥時代

に創建された。

景行天皇の時代、日本武尊の子（または弟）讃留霊皇子（さるれおうじ）が天皇より土佐の海で船を襲い人を食して暴れる大魚の退治を命じられた。これを知った大魚は瀬戸内海に逃げ込み志度浦に隠れた。これを見つけた霊子の軍は攻撃を行ったが一同は大魚に飲み込まれた。霊子は一計を案じ、もろともに飲み込まれた軍船に火を着け大魚を退治した。後に、里人は大魚の祟りを恐れ、霊魚堂と呼ばれる小堂を建立し地蔵菩薩を祀ったという。地蔵寺の名はこれに由来する。

魚霊堂と同名のお堂が坂出高校敷地内にも現存している。坂出の場合は退治した後数百年を経ても異変が続いたので、行基が御霊を供養するために像を造りお堂に安置している。祟りをなす荒神を祀って守護神となす信仰は瀬戸内全般に多く見られる特有の信仰形態である。志度寺ではこのほかに房前の母が玉を竜宮より取り返した伝説も残っている。

3.3 三寶大荒神

仏法僧の三宝を守護し、不浄を厭離（おんり）するという。荒神は仏法と伽藍の守護神である。像容としての荒神は、インド由来の仏教尊像ではなく、日本仏教信仰の中で独自に発展した尊像であり、三宝荒神はその代表的な物である。日本古来の荒魂（あらみたま）に、古代インドに源泉をもつ夜叉神の形態が取り入れられ、神道、密教、山岳信仰などのさまざまな要素が混交して成立した。荒神を祀る社寺は日本全国に約 300 社ある。不浄や 災難を除去する神とされることから、火と竈の神として信仰され、かまど神として祭られることが多い。御神楽謡詞の三方荒神では無い。

3.3.1 三つの幣帛(へいはく)

三つの幣帛は神の遷代(任期を終えて他の官職、特に上級職に転じること)で、この場合は三宝荒神である。甕は厳かを意味し鎮めるもの平らげられたものの御霊を納めるところ、この甕の前にも幣帛(神社で神前に奉獻するものの総称。みてぐら。ぬさ。)があり遷代である。

3.3.2 七本の矢

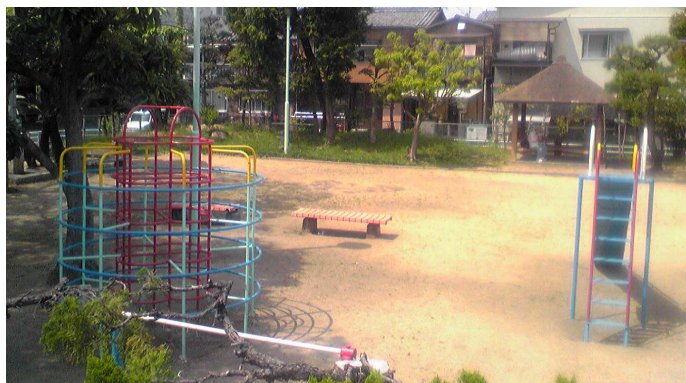
七本の矢は天神七代(天地開闢の初めに現れた 7 代の天神)を意味している。『古事記』では、別天津神の次に現れた十二柱七代の神を神世七代としている。『日本書紀』では天地開闢の最初に現れた十一柱七代の神を神世七代としている。

4 利生院と西大寺円満院、荒鎌宮

利生院は西大寺円満院の修験部門として創立された寺院である。『西大寺町誌』に「利生院 西大寺字旭町、本尊 不動尊、元修験真言宗、山城国宇治郷醍醐村三宝院の末山にして、本国邑久郷下笠加村清楽院の末派なり、創立明暦三年(1657)月日不詳、開基慶勇なり。」とある。『吉備温故秘録』巻之八 村落六には、「西大寺村 真言宗金陵山西大寺観音坊、当山方山伏利生院」とある。当山方とは真言宗系山伏であり、天台宗系は本山派である。『吉備温故秘録』巻之二十九 仏刹三山伏に、「備前国岡山並四十八ヶ寺、作州本山・楨山・西大寺 報恩院」とあり、児島郡の新熊野山報恩院が備前西大寺を管轄していた。

『吉備温故秘録』に「利生院 同、西大寺々中円満院 上道郡西大寺村」とあり、「同」は「大楽院の妻子は真言宗豆田村円福寺」を意味している。西大寺円満院は『西大寺町誌』に「西大寺円満院 天平勝宝二年(750)3 月創立。西大寺字掛之町。宇喜多家が藩主の時には扶持があつて中本寺といった。明

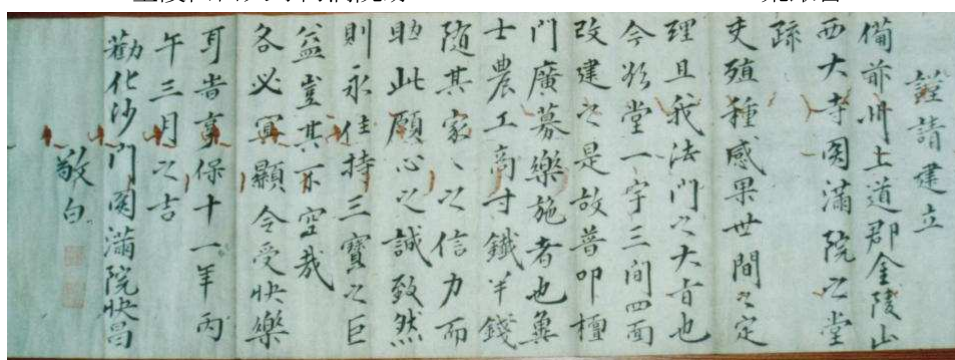
治 44 年 9 月 4 日、普門院に合併す。」とある。中本寺とは「本山・南都西大寺」との中継寺院の意味である。荒鋤宮は西大寺円満院の鎮守である。祭神は本地將軍地藏菩薩(道祖神と習合した地藏)と三宝荒神、天満大自在天神(菅原道真)である。祭祀は普門坊円満院住職が兼務している。



金陵山西大寺円満院跡



荒鋤宮



金陵山西大寺円満院 1726 年（享保 11 年）謹請建立

5 利生院 池田家 寺社奉行所記録

利生院記録は池田家文書『社寺旧記』にある。寺社奉行所の記録である。

「1787 年 当山方利生院へ年峯仕候様ニと三輪山先達より申来一件」

「1794 年 山伏利生院不埒有之長屋入並御免之事」

「1808 年 西大寺山伏利生院出世官職ニ付不筋有之長屋人ニ成其後御免法衣着用一件」

と記録されている。

6 六角形の 「六壬神課」

6.1 晴明神社の六角形祈念石

晴明神社(福井県敦賀市相生町)に六角形の祈念石が安置されている。「晴明神社由緒」に 祭神 保食神 安倍晴明公 春玉稲荷 当社は往古より保食神(食物を守護する神)の旧跡で安倍晴明は正暦年間(990～994 一条帝)当地に住み天文地文の研究をし、日夜この神祠に参詣、信仰心甚だ篤かった。天文の奥義を究めるに供した霊石(晴明の祈念石)である。



晴明神社



六角形の祈念石

6.2 常光寺観音院会陽のシンギ

常光寺観音院（日比観音院・岡山県玉野市日比）会陽で奪い合うシンギは六角形である。シンギの中央部が中空になっている。



常光寺観音院会陽のシンギ

六角形の的は陰陽道の六壬神課（りくじんしんか・りくじんじんげ）を意味している。奈良～平安時代の陰陽寮で式占（ちやくせん）が行われていた。式盤を使った種々の占いの総称である。『古事類苑』「方技部七」に記録があり、六壬神課の古さが分かる。「式占とは、六壬、太乙、雷公、遁甲の四種の占卜の総称にして、皆式盤を用いるに由りて名づくる所なり。六壬占は、年月日時、及び行年方位の干支を推し、四課、十二将、十二神を弁じて占うものなり。中古以来、太占（ふとまに）既に絶え、易占い漸く衰うるや、陰陽寮は神祇官の亀卜と並びて、専ら此の占法を用」

六壬（りくじん）の歴史は大変古く紀元前 2600 年頃にさかのぼる。中国の黄帝が九天玄女より伝授され、周の文王や、三国時代の蜀の諸葛孔明等が利用した。孔明には「六壬類苑」という著作もある。中国では六壬のことを「孔明馬上の占い」といい、三国志の中に 出てくる名軍師・諸葛孔明が馬上で、手の平の上に六壬の課式盤を作って戦の趨勢を占った。平安時代に日本へ伝わり、陰陽道の陰陽師達によって盛んに利用された。陰陽師達が六壬で占った占例が、現在も数多く残されており、安倍晴明は「占事略決」という六壬の書を残している。日本では国家の大事の占に六壬が利用された。

7 千葉県の御的神事

「弓引き」「マト」は、社寺の境内に的を立て、弓でその的を射る神事である。騎射と歩射 に区分される。流鏑馬に代表される騎射が、馬上からの的を射る。歩射は「カチユミ」、「オビシャ」、「破魔」、「百

手」、「引目」などと呼ばれている。地上からの的を射るものであり騎射よりも起源が古い。騎射が秋の行事として行われるのに対して、歩射は年頭の行事として行われる。 的には「鬼」の字が書かれる事が多い。弓引き神事では「6」と言う数が用いられることが多く、射手が6人、射る数が12本、36本といった「6」の倍数が現れる。

7.1 日枝(ひえ)神社の御神的神事

日枝神社(千葉県南房総市三芳村増間)の御神的(おまと)神事の起源は 715～723 年とされている。丸的 黒 3 輪 直径 1.8m 距離 23 間半 (約 43m) 千葉県指定無形文化財で、重藤の弓を使って農作物の豊作と凶作、天候の順不順を占って飢餓を避ける行事として 1300 年前から代々伝えられる。赤い鳥居の下から 43m 離れた直径約 2m の的に向かい、交互に 36 本の矢 を射る。最初の 12 本が早生(わせ)、次が中生(なかお)、最後の 12 本が晩生(おくて)を占う。



日枝神社



一松神社

7.2 一松神社の御神的(おまと) 神事

一松神社(千葉県長生郡長生村本郷)のお的神事の起源は天文 3 年 (1534) である。和紙 28 枚を張合わせる。六角形の的。直径 90cm 距離 15m。 第 1 の矢 年の吉凶 (神の矢)。第 2 の矢 早生稲の豊凶 (早生の矢)。第 3 の矢 (中生の矢)。第 4 の矢 晩生稲の豊凶 (晩生の矢)。神占により作柄を予想し種蒔きをする。

8 徳島県の御的射神事

中野は阿波出身者の部落とされている。徳島県の御的射 (おまと) 神事を調査した。

8.1 阿波の八幡神社 御的射神事

八幡神社 (阿波市市場町大俣地区) で 2010 年 1 月 10 日、御的射 (おまと) 神事がある。神社の氏子ら約 50 人が無病息災や家内安全を祈る。地元の子どもらが烏帽子 (えぼし) に袴 (かみしも) で正装し、児童 6 人が射手を務め、弓に矢を構え、「鬼」と書かれた的を射る。その年の家内安全を願う神事である。病魔や災いに見立てた的をめがけて次々と矢を放つ。矢が的中するたびに観客からは大きな拍手が送られる。八幡神社の御的射は江戸時代の 1705 年から一度も休むことなく毎年続いており、2010 年で 305 回目である。



八幡神社 御的射



白人神社 御的射祭

8.2 白人神社 御的射祭

白人神社（徳島県美馬市穴吹町口山字宮内）は 1596～1614 年（慶長年間）の初め、稲田修理亮によって再興された。阿波藩の家老であり脇城主（後に淡路城代）であった稲田家の信奉が厚かった神社である。保元の乱後讃岐の崇徳上皇をたずねた源為朝が阿讃国境の相栗峠で弓を引いたところ、その矢が白人神社に落ちたと伝えられ、それ以来、弓は神社宝物となり、旧正月十四日御的射が行われている。白人神社御射祭（馬場と呼ばれる広場に「鬼」と書かれた1間四方の的を立て射手 6 人が的を目標けて一人ずつ矢を放つ。実施日旧暦 1 月 13 日から 14 日）白人神社は、もとは南面する神明神社にあり、保元の乱(1156 年)の後、源為朝によって現在地に移された。旧美馬郡は式内伊射奈美神社を初め、高天原伝承を持つ鏡神社や、天孫降臨を暗示する式内天の椅立神社が鎮座する記紀神話の中心舞台となっている。

8.3 川田八幡神社の「お的」

川田八幡神社(徳島県吉野川市山川町)で「お的」が 2 月 11 日午前 10 時から行われる。川田八幡神社は、山川町川田で最も大きな神社で、往古より「忌部氏」の尊崇が厚く、由緒には「当社は往古より忌部氏の守護神として三女神を祭る所なり、忌部宿禰に勅命して当社を御勅願所として定め、宮殿を再建させ、神田・神輿等の寄進があった。又、文治 5 年(1189 年)には、源頼朝の命により再興された。」とつたえられている。(林博章『日本の建国と阿波忌部』より)



川田八幡神社の「六角形のお的」

9 屋敷神

中野本町は備前西大寺地区で最も早くから開墾された地区であり旧家が多い。屋敷神は屋敷と土地を

守護する神であり、屋敷裏や敷地内に祀られる祖先神である。神がその場に常在すると信じるようになった後世の祠社である。一族の祖霊という神格から屋敷神を祀るのは親族の中でも本家のみだった。神体は古木や石である。古い信仰形態である。屋敷神へ小的を奉納している。



屋敷神



岡崎四郎常感(盛)の墓

10 長蓮寺と岡崎四郎常感(盛)の墓

天保 8 年(1837)成立の地誌『東備群村志』に、「中野 長蓮寺 昔此仏宇あり。岡崎四郎常感が墓、此地にあり。又、一塚あり。宗心の墓と云ふ。畠山の末孫の由。」とある。『吉備温故秘録』村落には、「中野村 潮見塚、宗心塚、岡崎常感墓」とある。岡崎常盛墓 との表記もある。備前西大寺最古の墓碑である。岡崎四郎常感(盛)の墓にも屋敷神用の小的を奉納している。

11 まとめ

中野本町の「オマツト供養」は、他所の「御的神事」と比較して異質である。

- ① お甕様と三寶荒神信仰が集合している。お甕様の中身は「どぶろく」である。農村で行われるお日待ちの祭祀、お当屋用の「どぶろく」である。
- ② 利生院寺伝「オマツト供養」の内容は、利生院住職の出身地、修行地の伝承と推定される。
- ③ 他所の御的神事は弓を射ることに目的があり、弓を射ることから神事が始まる。

「オマツト供養」は、僧が大弓矢をもって第一の矢を放つ。ついで、第二の矢を放つ時に、 的は段々と前方に傾き僧の頭上に迫る。しかし僧はなお容易に矢を放たない。もし放つと 矢が尽き、鬼の的に圧伏されることを恐れるからである。ようやく放つと、急に鬼の的に 僧を圧伏する。もしも、この時、逃れて場外に出ると、敢えて追跡しないが、万一にも機を失して圧えられると、茶色の法衣と剃り立ての頭は忽ち真黒となり、観衆はドッと笑う。 近頃はこの圧伏するかどうかによって、部落の豊凶を占うようになったので、この行事を 五穀成就祭と変えた。(大正 11 年上道郡誌)

- ④ 六角形の的は、陰陽道の六壬神課（りくじんしんか）を意味している。

⑤ もう一つの的

定本孝彦氏は「的の形状に、もう一つの形がある」と教示される。『西大寺臨時特別号』平成 11 年 12 月号の表紙に「オマツト供養」の写真が紹介されている。昭和 13 年の青江藤七氏宅の写真である。この的が正式伝承に基づくのである。

重要なのは、『的に再び墨汁を塗り、茶色の法衣と剃り立ての頭は忽ち真黒となり、観衆 はドッと笑

う。』との記録である。「オマツト供養」の他の御的神事との違いは、「茶色の法衣と剃り立ての頭は忽ち真黒になる」にある。つまり、乾いていない墨汁である。「オマツト供養」の原点は『道教』の「塗炭祭」となる。病氣平癒を祈る神事である。



昭和 16 年 2 月 高畑氏宅



昭和 13 年の青江藤七氏宅

そうして、終夜祈念し、翌 28 日の日の出の刻となると、的に再び墨汁を塗り、若者が二人 で下端柄を持って式場の一方に立つ。僧も亦、大弓矢を持ってその数歩前に立ち、「アビラン」と唱えてまず第一の矢を放つ。(大正 11 年上道郡誌)

江村一光住職の教示(平成 23 年 3 月 1 日)訂正 「アビラン」⇒「アバン」

※ 山伏問答の斧先達 御作法に「エイ エイ アバン ウン」がある。

参加者は、読経と香と灯明の中を、顔に炭を塗りたくって登場します。太鼓が細かいリズムで徐々に昂奮を誘う中、参加者の一人一人の姓名、道徳的罪科が読み上げられます。顔に塗られた炭は彼らの罪を表す表徴であり、・・・昂奮した信者たちは地面の泥の中を転がまわり、その狂気は次々に伝染して、参加者の全員が泥の中に転げはじめると、外で取り巻く群衆もその熱気に感染して信者の中に加わるのです。・・・参加者は、そこで、告白と懺悔を行い、罪の結果としての病気を避けようとしてしました。

(『道教』アンリ・マスペロ)

⑥ 平成 23 年 3 月 6 日(日) 7 時～の祭礼



鬼と書いた大的に矢を射る。四方と上空、そして地元の代表も一射、現在では、住職の法衣が汚れないように黒衣を羽織った鬼(役の黒衣の人)が逃げ回り、その鬼を大的が追いかけて鬼をねじ伏せて、悪霊退散を祈り祭礼終了となる・



⑦ 中野は阿波出身者の部落とされている。徳島県の御的射神事の『鬼』という文字から 推定し阿波から伝来した神事である。川田八幡神社(徳島県吉野川市山川町)に注目している。忌部氏は中臣氏と共に

古代の皇室祭祀に奉仕してきた氏族である。

12 おわりに

「オマツト供養」開催地の祇園宮荒神社は我家より歩いて 10 分である。昭和 46 年に『西大寺町誌』を読み「オマツト供養」に関心を持った。現在迄、伝承されているとは思ってもみなかった。中野地区の各班の持ち回りで継続開催されている。

13 追記

利生院の正式名称は、日光山等福寺利性院(岡山市東区西大寺中野 771-1)であり、本尊は不動尊である。平成 19 年 4 月の移転前は荒鉏宮近くの岡山一心堂病院の前にあった。



日光山等福寺利性院 版木

14 謝辞

「オマツトの語源は御的である」と平成 22 年 4 月 25 日の岡山民俗学会総会にて今木義法先生に、「四国の悪龍伝説及び関連事項」については、平成 23 年 3 月 1 日に大井透氏(坂出市)にご教示戴いた。平成 23 年 3 月 6 日に中野南班の大西氏より『平成 21 年度お甕荒神社お当夜祭』のアルバムを見せていただいた。貴重な記録である。

15 参考文献

- ① 『西大寺町誌』昭和 46 年 西大寺町誌刊行会
- ② 『西大寺村誌』明治 15 年 昭和 46 年 西大寺町誌刊行会
- ③ 『上道郡誌』大正 11 年 上道郡教育会
- ④ 『西大寺の祭』昭和 50 年 12 月 西大寺愛郷会
- ⑤ 『西大寺臨時特別号』平成 11 年 12 月 西大寺愛郷会
- ⑥ 『東備郡村志・吉備群書集成(二)』松本亮 昭和 45 年 歴史図書社
- ⑦ 『五流山伏 改訂版』三宅淳彦 平成元年
- ⑧ 『吉備温故秘録』『吉備群書集成』1932 年 吉備群書集成刊行会
- ⑨ 『吉備真備』宮田俊彦 1988 年 吉川弘文館
- ⑩ 『古代豪族系図集覧』近藤敏喬編 平成 5 年 東京堂出版
- ⑪ 『日枝神社の御神的神事』(南房総市三芳増間) <http://blog.goo.ne.jp/>
- ⑫ 『一松神社 御神的神事』<http://homepage3.nifty.com/f-shima/gallery/chsei01.html>
- ⑬ 『およそ 300 年も続く神事『御的射』に願う』<http://blog.goo.ne.jp/>

- ⑭ 『白人神社・神明神社』 <http://www.city.mima.lg.jp/>
- ⑮ 『道教』 アンリ・マスペロ 東洋文庫 1980 年 平凡社